

『レザボア・ドッグス』

1992 年／アメリカ／クエンティン・タランティーノ監督作品

高校生の私を夢中にさせた 「吹き溜まりの犬達」に感謝

会員 今西 順一 (59 期)

『レザボア・ドッグス』Blu-ray
価 格：4,935 円 (税込)
発売元：ジェネオン・ユニバーサル・
エンターテインメント



「吹き溜まりの犬達」といった程度の意味の題名が冠せられた、この映画ですが、私が見たのはおそらく、高校生の頃だったと思います。

真っ黒のスーツを着た人相の悪い男達が、宝石強盗をする、しかし、事前に警察の手が回っており、死人までで大失敗。散り散りとなってアジトに帰ってきた男の一人が言います、「このなかに犬（警察の手先）がいる」と…。

このようなオープニングから、時間軸を入れ替えながら物語が展開して、男泣きに泣くハーヴェイ・カイテルの姿で幕を閉じるエンディングまで、高校生の私は夢中でこの映画を繰り返し観ました。

映画のなかで繰り返されるのは、強盗、拷問、暴力、銃撃戦、悪い男達の仲違いとその間で繰り返られる絶妙な会話、そして、男の友情物語であり、最後の点以外は、心穏やかにさせるものは何もありません。

また、登場人物は、警察官以外ろくな人間ではありません。プロの犯罪者集団どもが宝石強盗をする話なので、当たり前ですが。

当然、心打つヒューマンストーリーも、人生を生きていくうえでの教訓を得ることもありません。むしろ、黒づくめのサングラスかけた強面の男達が、手には拳銃を握り仲間割れしているのですから、こんな奴らとは仲良くしたくもありません。

でも、こんな男達がカッコよく、魅入ってしまう物語になっています。

この映画は、1991年に制作されています。制作費は900万ドルで、今や大物監督のクエンティン・タランティーノが脚本、監督、出演までこなしたデビュー作であり、つまるところ、お金はかかっていないけど脚本と演出と俳優の力が結集した作品ということでしょうか。ハリウッドのメジャー作品などばかり観ていた高校生の私は、この作品をみて、以後、映画三昧（といっても年間100本くらいですが）の大学生生活に突入することになりました。映画って面白いな、と心から感じる事ができたからです。

今回、改めて、おそらく15年ぶりくらいに全編を見通しました。ただ、かつてと今では、やはり印象に違いもあって、高校生の私は男の友情物語としてのイメージを強く持っていましたが、今観ると、その印象はだいぶ薄まりました。

しかし、そのようなことはどうでもいいことです。あの頃に観た、渋いハーヴェイ・カイテルが、カッコいいティム・ロスが、凶暴なマイケル・マドセンが、変わらずに画面に登場して、あの頃と同じ台詞を喋ってくれます。すると、このシーンを繰り返してみたな〜という記憶とともに、当時の自分の高校生活の思い出や感覚が蘇ってきます。そのように感じる事ができるのは、15年くらい前にビデオテープを何度も巻き戻してこの映画に夢中になったおかげです。

というわけで、「吹き溜まりの犬達」には、ありがとうと言いたいですね。